仙台北三番丁教会
2023年8月6日　三位一体後第9主日

剣のような平和

仙台宮城野教会牧師　齋藤　朗子

聖書　マタイによる福音書10章34～39節
34：わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、と思ってはならない。平和ではなく、剣をもたらすために来たのだ。
35：わたしは敵対させるために来たからである。
　　人をその父に
　　娘を母に
　　嫁をしゅうとめに。
36：こうして、家族の者が敵となる。
37：わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。
38：また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。
39：自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。

本日のみことばは、主イエス様のおおらかさや優しさといった、聴く人がホッと安心できるような印象を受け取ることが難しいところだと思います。いつもは愛と赦しと平和を実践なさる柔和な主イエス様が、急に「私が地上に来たのは、平和をもたらすためではなく、かえって、人と人との間を仲たがいさせるためだ」とおっしゃることに、少なからずショックを受けられた方もいらっしゃるかもしれません。

本当に、今日のみ言葉は、受け取る私たちにとってはとても厳しいものです。なぜならば、私たちは、このイエス様のみことばを通して、それぞれの人生において、結局のところだれを一番に愛しているのか、だれを一番信頼しているのか、あるいはまた、34 節よりも前の流れから言えば、だれを一番おそれているのか、このことを問われているからです。

2020 年の冬に公開された映画で、「名もなき生涯」という作品があります。アメリカとドイツの合作で、舞台は第二次大戦中のオーストリアの山村です。村の住人はほとんどが農民で、山の斜面の麦畑では協力しあって作業をし、井戸から水を汲み、パンをこね、家畜を飼い、糸をつむぐ、そんなあたりまえの生活を営んでいます。しかし、戦争の暗い影は次第に村にも及び、村の男性たちは軍事訓練に参加させられ、やがて召集が始まります。

この作品の主人公のフランツは、妻のファニと、3人の幼い娘と暮らす平凡な農夫です。彼の両親とファニの姉も同じ村に住んでいます。村人は、一人、また一人と戦争のために召集されていきますが、フランツは、神の名の下で罪もない人々を殺すことなどできないから、召集には応じない、という思いを固めてゆきます。しかし、このことが理由で、次第に村人たちとの間に溝ができてしまいます。

村の村長は、今の生活があるのはドイツのお陰だと言って、フランツを売国奴のように非難し、妻のファニも村人たちから無言でにらまれ、唾をはかれ、幼い娘たちも教会の行事に参加させてもらえないなど、一家は村八分にされてしまいます。教会の神父といえば、ただ「上に立つ権威に従え」とか「国への義務を果たせ」

「家族のことも考えろ」としか言いません。フランツの母は、フランツが戦争に行かないと決めたのはお前の影響だと言って、妻のファニを責めます。一人の名もない農夫であるフランツが、神の掟に従って「戦争にはいかない」と決めたその決意は、村人の平穏を乱す「剣」となり、隣人や実の母までもがフランツ夫婦を敵視するようになってしまいました。

フランツは、信仰や平和や人の善悪について声高に語ることはしません。ヒーロー然ともしません。寡黙な彼は、ただ「戦争で人を殺すのはおかしい、それは神の意に沿うことではないという」己のなかの、物事の良し悪しについての「感覚」に従っているだけです。妻のファニだけは夫の考えに賛同し、最後まで支え続けます。

あるとき、再度軍事訓練に赴いたフランツは、そこでヒトラーへの忠誠を誓うことができず、とうとう収容所に収監されてしまいます。幾人かの人物が、フランツを説得しようとします。作中、役柄や名前がハッキリと出てこないのでよくわからないのですが、ある私服の軍人か弁護士のような男が、「きみ一人が抵抗したところでなんになる、状況が変わると思うのか、当局が態度を改めるとでも言うのか、塀の中でなにが起きているかなんて、誰も知らない、無駄な抵抗だ」などと、淡々と諭すようにフランツに語ります。そして、「君は人よりも優れているのか、自分が潔白だと言いたいのか、善悪がわかるとでも言うのか、このわたしよりも分別があるとでも言いたいのか、天からの啓示を受けたとでもいうのか、神の声を聞いたのか、潔白な者など一人もいない、誰もが手を血で汚しているんだ、良心は人の心を弱くする」などなど、執拗に、この人物はフランツの決意をゆさぶろうと言葉を重ねます。それでもフランツは、決して忠誠を誓うことをせず、ついに軍事法的で死刑が言い渡されます。

フランツは、妻が悲しもうが、自分が死んだ後の生活がどうなろうが、そんなことはどうでもいいと思っていたのではありません。フランツは妻を心から愛し、妻もまたフランツを心から愛していました。フランツの決断は結果的に彼に死をもたらしましたが、妻は、この悲しみにはいつか答えが見つかるはずだと、フランツの決意と彼の死を静かに受け入れます。

この「名もなき生涯」という映画は、実話がもとになっています。主人公のフランツは、殉教者として 2007 年にカトリック教会で「福者」（聖人の一歩手前）の称号が与えられました。ある映画サイトで、「フランツを恥じた村人たちが、長らくこの事実を公表せずにいたが、フランツの存在を知ったカトリック教会は、2007 年に彼を福者とした」という説明が書かれていましたが、私はそれを読んだときに、村人たちがフランツの存在を恥じたのではなく、フランツによって村人たちが自らを恥じたから、フランツという人の生涯が公になるのに 60 年ほども時間がかかったのではないかと思いました。しかし、そうだとしても、私はフランツの生涯を隠し続けた当時の村人たちを責めることはできませんし、この映画を見た人たちも、おそらく多くの人たちが、「私はフランツのように生きることは無理だ」と感じたに違いありません。

この映画でとても印象に残った言葉がありました。それは、フランツにヒトラーとナチス・ドイツへの忠誠を誓わせようとする人々が口をそろえて言っていた、「ヒトラーやナチスへの忠誠など、言葉だけのことだ」という言葉です。心までは誰にもわからないから、とにかく口先だけでも忠誠を誓えば死刑は免れると、何人もの人がそう言っていたことです。「言葉だけでいい、そうすれば、戦地ではなく病院で働けるように手配してあげよう」という人もいました。フランツの村の村長は、そうすれば、村の危険は避けることができる（当局から目を付けられずに済む？）と言い、村の神父は、そうすればきみのいのちも家族も守れる、と言いました。しかしこれが、本当の意味で人の命を尊重し、平和を築くための提案・助言でないことは、誰にでもわかるでしょう。彼らが提供しようとしているのは、「とりあえずの、命の無事」にしか過ぎません。確かに言われた通りにすれば、今日の命は守られるかもしれません。しかし、人としての尊厳は失うのです。

もしもこんな風に、口先だけでいいから、という人が目の前にいたとしたら、軽蔑の思いが沸いてくるかもしれないと思いました。しかし、翻って自分の事として考えてみるならば、私自身、「主イエスを愛する」「父なる神を愛する」というとき、どこまで本気で言っているだろうか、どこまで愛する神の掟に忠実でいられるか、と

いう問いが迫ってきます。

終わりに、聖書が語る「平和」の、重要な三つの特徴をお伝えします。

一つは、神に対して、また隣人に対して、神の掟に従って善を行うことが、平和の基礎であるということ（ルカ10・25～その他多数）。

二つ目は、国籍、民族、身分、性の差別を超える教会だけが、地上において人々の間の平和の場となり、平和の徴となり、平和の源泉となること（ガラ3・28、コロ3・11）。

そして三つめは、イエス・キリストが再び地上にこられて、この世界の王であることが明らかになるときにはじめて、決定的な、普遍的な平和が訪れるということです（終末について）。

私たちが、この3つのことを念頭に置いて物事を考えて、決断し、行動するところで、主にある「平和」は創られてゆくのではないでしょうか。

今日のところは、差し迫って、自分の命を懸けて「私は父母よりも、隣人よりも、自分の住む国の権威ある者たちよりも主を愛する、ゆえに、その御心に反することはできない」と言わなければならないようなことは起きないかもしれません。

しかし、私たちが平和の君である主イエスに従う者であり、いつか時が来たときに「自分の十字架」を担う者でありたいと願うのならば、私たちは、聖書と祈りを通して神の御心、主イエスが持っておられた価値観、人間観、世界観、そして主の平和というものをいつも心に刻み、ごく当たり前の日常、平凡な毎日の中で、ふだん関係のある近しい人々との関係において、それらを言葉や態度で表明してゆきたいと願わされます。戦争とか、犯罪とか、災害といった、いわば非日常的な出来事の渦中にいるときだけでなく、まずは普段の家や職場、いつも見る顔、それらといつも通り暮らす日々において、私たちも「平和」への準備をしてゆくことができるのです。